

# 季刊地理学

## 研究ノート

輸入量変動下のブロックリー産地における農協共販組織の対応  
—埼玉県深谷市を事例として—…………… 深瀬 浩三… 121

## 書評・紹介

イザベラ・バード著 金坂清則訳：完訳日本奥地紀行2新潟—山形—秋田—青森(小岩直人)

京丹後市史編さん委員会編：京丹後市史資料編 京丹後市の災害(小松原琢)

元木靖著：中国変容論——食の基盤と環境(小野寺浩)

2013年度春季大会記事

学会記事

研究集会のお知らせ



東北地理学会

Vol. 65 No. 3

2013

元木靖著：中国変容論——食の基盤と環境 海青社、2013年、360ページ、3,800円＋税、ISBN978-4-86099-295-8

日本とは一衣帯水の関係にある中国がますますダイナミックに変容を遂げていることは誰の目にも明らかであり、その中国の変容が実際にはどのようなものかをよく理解したいという意識は、基本的には多くの日本人に共有されているだろう。しかしながら、目下のところ日本と中国の政治的な関係は緊張したままであり、そのことが密接なはずの経済関係やその他の多様な交流へも影響を与えている。そうした状況を反映して、中国に対する一方的な言説を耳にすることも多くなった。そして一部の人々は中国という存在を嫌い、目を背けてしまおうとさえしている。

このような時期に出版された本書は、著者が序で述べているように「中国の変容を眺めてみたい」という素朴な問題意識が出発点にはなっているけれども、目の前の状況にとらわれてしまうことなく、もっと長い時間軸の中で、「文明史的な視点」から中国を理解することを目標に掲げているという点において、他書と一線を画している。そして本書は、実はただ眺める、あるいは中国の状況を詳細に描写するだけではない。急速な工業化・都市化にともなって人々が自然から遊離してしまい、「問題を目の当たりにしてもブレーキをしっかりとかけることができない人間を増幅させてしまっている」ことを、日本が歩んできた高度経済成長の道筋を想起しつつ、批判的に指摘している。このようにきわめてメッセージ性が強いことも本書の特徴になっている。

本書は、「第I編 水——長江流域における早期都市の立地と水利の環境史」、「第II編 土地——人口圧と農地開発／都市化と土地資源問題」、「第III編 食糧——市場経済下の産業構造調整と食糧生産地域の変容」、「第IV編 環境——急速な経済成長に伴う社会の変容と地域環境問題」の4つの部分から構成され、全部で16の章が並んでいる。人間と自然が地域においてどのような関係性を紡ぎあげてきたのかを多面的にとらえようとする意図が、その構成からうかがえよう。以下、各章の内容を概観していく。

第I編の3つの章は、長江の上、中、下流域それぞれの古代都市文明に注目してその地域の自然環境と水利システムを考察し、その上で現在の状況を位置付けるという大胆な内容になっている。第1章は、長江上流部における早期の都市文明としての三星堆遺跡とそれを含む成都平原に焦点を当てている。文明の中心地

が沱江の支流が形成する複合扇状地から岷江が都江堰を起点として形成する単独型扇状地へ移動したことを、多くの先行研究を吟味し、ミクروسケールの土壌、地下水、地形などに関する諸資料を分析することによって、わかりやすく説明している。さらに、中華人民共和国期における灌漑システムの変化については、現地における景観の観察や聞き取り調査によって明らかにしている。

第2章は、長江中流域の豊陽平原を対象地域とし、中国で最も古い都市遺跡とされる城頭山遺跡に焦点を当てている。池沼の形態と分布に着目して地形図上の分析から類型化し、現地での聞き取り調査を交えて考察を進めている。水利に関する地名の分析や古来の灌漑技術の復元まで行って、多角的に伝統的な灌漑システムを検討している。第3章は、長江下流域の太湖平原と良渚遺跡に焦点を当てている。良渚文明について先行研究を整理して概観した後、地域の水環境については、現地調査の成果を加味しながら、大縮尺の地図上で水利網や集落配置を分析している。そして、クリークと稲作の関係を通時的に論じている。

第II編は、各章とも、人口と耕地の関係についてもっぱら統計データを利用した考察を行っている。第4章では、1990年頃までの状況を踏まえて、中国全体に関する、耕地からみた経営の零細性、地域間格差の拡大、および大規模な人口流動について解説がなされている。第5章では、1995年頃までのデータを踏まえて、人口の増加と耕地の減少という状況が示され、今後の低開発地域での本格的な農業開発が見通されている。第6章では、2001年のWTO加盟以降までを視野に入れて都市化と耕地減少の関係がテーマとなり、アジア諸国との比較をしたのち、中国各地における都市化率と耕地率の相互関係が2003年と2008年の各省の統計データを用いて論じられている。都市化が耕地減少を促しているという全体的な傾向に関する主張に異論はないが、散布図を見る限りではいずれの関係も相関が弱く、また異常値も散見され、細かな解釈はあまり説得的ではない。

第III編には、近年の食糧生産地域の変容に関する論文が集められている。第7章では、経済改革期(1978年以降)の食糧生産の変化が概観され、食糧確保の段階から、米やトウモロコシを中心した食糧増産の段階を経て、最近では農村や農民の生活向上を目指す段階へと移行しているという。第8章では、食糧作物の播種面積と生産量の2001年までの経年的な分析が行われ、北方における生産の比重が高まっている傾向が見

出された。第9章では、特に食糧生産の地位を高めている東北地区の動向が示されるが、同時に、伝統的な農産物が大量に滞貨し増産しても農民の収入が増えないという「新東北現象」にも注意が払われている。

第10章は、吉林省の事例研究である。前段では、1950年以降の変遷を概観した後、省を東部・中部・西部と3つの地区に分けて統計データによる分析を行い、それぞれの地区の条件の相違によって食糧生産をめぐる1990年代の変化が一様ではないことが明らかになる。そして、後段では東部地区(延辺朝鮮族自治州)における現地調査によって、地域内での状況が詳らかにされる。第11章は、主に黒竜江省の事例研究である。前段では1980年以降の食糧生産の動向や市区別のデータの分析による地域構造の変化が説明される。後段では、水稻栽培に関する現地調査に基いた4か所の事例(一部は吉林省)が報告され、東北が徐々に米の供給地の役割を果たしつつあること、日本の寒冷地型の品種と栽培技術が大きく貢献してきたこと、そして、労働生産性を向上させるための基盤整備や機械化の進展が遅れていることなどが指摘されている。

第12章は、再び中国全体を視野に入れて、統計データによって近年の食糧生産の地域構造を考察している。中国国内における食糧生産地の構造変化にともなって、「北糧南調」(北方で生産された食糧が南方へ運ばれる)への歴史的な転換点を迎えているという指摘や、経済成長期に稲作が工業化・都市化が激しい地域から寒冷地へ移転する構造は日本と極めて類似しているという指摘が興味深い。

第IV編には、経済改革を契機とした急速な経済成長により、長い歴史の中で培われてきた人間と自然との秩序が急変して様々な地域環境問題が発現してきた、という問題意識から、4つの事例研究が集められている。第13章では、急速な経済成長を遂げてきた長江デルタ地域の水質汚染が分析対象となり、その問題を工業化・都市化の影響であるとするだけでなく、農畜産業の変容の影響も同時に複合的に関わっていることを説明している。第14章では、乾燥地域である新疆ウイグル自治区のオアシスにおいても水稻作が行われている事例が紹介され、水利の競合が水利利用秩序の混乱を招いている状況が報告されている。第15章では、同じく新疆ウイグル自治区の牧畜地域における草原破壊の問題が取り上げられ、丁寧な聞き取り調査と詳しい統計データや地図資料によって分析が進められている。そして、伝統的な生業の形態が市場経済化に起因して急速に変容し生態系を破壊してしまう現状

が、生々しく伝えられている。最後の第16章は、中国の西南地区、雲南省南部の棚田地帯が研究対象地域である。地形図を十分に利用しながら、棚田の分布や集落の立地などが具体的に明らかにされ、また民俗学や宗教学の既往研究も援用しながら、この地域の棚田・集落・森林といった要素から構成される空間モデルが提示される。さらに、この地域が周辺的な位置にあるために、近年の市場経済化の流れの中で貧困化し、その対応策として観光化が進む過程にあることが指摘されている。

改めて本書の特徴として強調したい点は、本書の著者が日本の稲作に関する第一級の専門家でもあることから、その豊富な知識と経験が中国を研究対象とする本書においても存分に生かされて、中国の農業をめぐる諸問題に対する透徹した分析が随所で展開されていることである。また、各種の図表や写真が多く載せられているので、読者も同時に研究対象地域の分析に参加できるかのようなものである。何よりも、現地調査の成果が生かされた論述の説得力が際立っている。変容する中国像を実証的に示すという本書の目的は、十二分に達成されていると評えるだろう。

さて、経済改革・対外開放政策以降の近代化が、それまでの長い歴史の中で行われた人間から自然への働きかけとは桁違いのインパクトを持ったために、驚くほどに急激な変容を招来し、それぞれの地域において人間と自然の生態的なバランスを崩してしまっていることは、本書が説くように、間違いないところだろう。ただ、そのように納得する一方で、改革開放以前の状態を無意識のうちに理想化してしまっているのではないだろうかという疑問も感じざるをえない。例えば、おそらく古代においては豊かであった森林資源が歴史時代を

通じて耕地の拡大とともに徐々に失われていったと見られることを、本書の文明史的な視点からはどう評価したらよいのだろうか。また、ずっと現代に近い時期のことではあるけれども、改革開放期の直前までの計画経済期において政治的なイデオロギーに従って生産を最優先させた営みを、やはりどう評価したらよいのだろうか。

もう一つ、研究上の残された課題として、中国の変容を考察する際に、グローバル化の影響がいよいよ大きくなっている現代社会において、中国の外部との関係性についてももっと検討を行わなければならないのではないだろうか。WTO加盟が中国農業に大きく影響したという点については本書においても言及されているが、具体的にはどのような因果関係が生じていたのだろうか。第III編で論じられた中国国内における食糧生産地の構造変化の議論（例えば「北糧南調」に関して）に接合する形で、国境を跨いで農産物の貿易に関しても検討を進めることが、次に取り組むべき課題となるだろう。

終章において著者は、中国の変容について、「農村自体の形成という方面への配慮が少ないままに都市経済が急速に進行しているように思われる」とし、「中国の伝統を踏まえた豊かな農村の形成という場面に遭遇したことは少なかった」と述べている。長年にわたって中国の様々な面を観察してきた著者によるこのような見解は重く感じられる。その一方で、「これからの中国の変わり方に注目していくことが極めて重要になる」とし、「めざすべき新しいアジアの姿を一日でも早く見極める努力をしていくこと」が最も重要であるとする締めくくりのメッセージに、読者は将来への希望を見出すことができるだろう。

(小野寺淳)